

史料紹介

『ブカ・マタ(Boeka Mata 開眼)』

— インドネシアのイスラム改革運動に関する一史料 —

利 光 正 文

はじめに

18～19世紀、西アジアやエジプトにおいてイスラムの改革運動が盛んとなった。この運動はインドネシアにも大きな影響を与え、様々な改革団体が活動した。インドネシアがイスラム化する過程で、多くの異教的・異端的要素がイスラムに付着し、特にそれは、ジャワ・イスラムにおいて著しかった。ジャワの心臓が脈打つ所、ジョクジャカルタのカウマン地区に生まれたキャイ・ハジ・アフマド・ダハランは、インドネシアのイスラムを浄化すべく、1912年、改革団体ムハマディヤを生まれ故郷に創設した。その後ムハマディヤは支部拡大に努め、ジャワ島内から1926年にはスマトラ、27年にはセレベス、さらにボルネオという具合に支部は広がり、イスラム改革運動の主導的勢力となる。

インドネシアのイスラム改革運動に関する研究としては、デリア・ヌルの労作^①があり、ムハマディヤ研究ではアルフィアンの著書^②に代表される。しかしながら両者の著作に共通する点は、改革運動にしる、ムハマディヤにしる、非常に体系的・網羅的で、その全体像を把握するには極めて秀でている。しかしながら、細部まで納得しようと思えば、やや難がある。ヌルの研究では小稿で取り扱おうアフマディヤが落ちているし、アルフィアンのものでは、ムハマディヤの支部活動、特に、ジャワ以外の地域での活動については詳述されていない。これら

の点が明確にされた時、インドネシアのイスラム改革運動についての我々の理解は満足のものとなるであろう。

湾岸戦争を契機として、イスラムに対する関心はとみに高まり、中東イスラムに関する書物が洪水のごとく出版された。それはそれなりに評価されてしかるべきであるが、なかには付け焼き刃的なものもあり、イスラムの狂暴性を誇張し、興味本位に書かれたものもあった。イスラムは多様性に富んでいる。多様性の1つ1つを説き明かすことが、正しいイスラム理解につながると思える。そのためには、地道な研究が必要であろう。

小稿では、イスラムの改革団体の一つアフマディヤを取り上げ、その史料を紹介する。アフマディヤについては、まだ研究が殆んどなされておらず、その実態は良く分かっていない。従って、小稿はアフマディヤに関する来たるべき研究の一礎石をなすものである。

1 カウム・ムダ(若い世代)運動

ミナンカバウ(西スマトラ)は“スランビ・メッカ(メッカの玄関口)”と呼ばれている。19世紀の初頭から40年近くにわたって続いたパドリ戦争はカウム・ムダ運動の出発点であり、メッカからもたらされたイスラム改革運動の始まりであった。シェイク・アブドゥルラフマンを初めとする20名もの高名な革新的ウラマたち^③、彼ら

の大半はメッカに留学し、イスラム改革思想を学んで帰り、ミナンカバウで改革運動を実践した。彼らをカウム・ムダと呼んだ。ミナンカバウで生まれたイスラム改革団体は数多い。例えば、アダビヤー、スラウ・ジュンバタン・プシ、スマトラ・タワリブ、プルサトゥアン・ムスリミン・インドネシア (プルミ)、アル・マドラサトゥ・ディニヤ^④等々、枚挙にいとまがない。特に、これらの改革団体の殆んどは教育活動に力を注いだ。なかでも、スマトラ・タワリブの活動が中心的な位置を占めた。これらのことは、ミナンカバウがインドネシアのイスラム改革運動の先進地であったことを如実に物語っている。即ち、ミナンカバウでは、カウム・ムダの一群が社会の主導的勢力となったことを意味する。

ところで、改革運動の老舗ミナンカバウに後発のジャワから進出し、母屋を取ってしまうのがムハマディヤである。現在、ムハマディヤの地域勢力の中では、ミナンカバウが最も勢力が強く、熱心な会員者が多くいることで知られている。

さて、ミナンカバウのムハマディヤ運動については、研究の進展が著しい。『ミナンカバウのムハマディヤ』に代表されるミナンカバウ出身のハムカの一連の研究^⑤。同じくミナンカバウ人タウフィック・アブドゥルラの著作^⑥。両者の研究により、ミナンカバウのムハマディヤ運動は、その実態の多くが解明されたと言える。カウム・ムダ運動はミナンカバウにおいて19世紀以来社会改革の主体的な力となり、ムハマディヤがその運動を集大成したと言っても過言ではない。けれども、ミナンカバウのイスラム改革運動で、まだまだ解明されていないものも存在する。それがアフマディヤの運動である。

2 アフマディヤ運動の概略

アフマディヤ (Ahmadiyah) はインドで生まれたイスラムの改革団体である。平凡社の『イスラム事典』によると、エジプトで13世紀にイスラム神秘主義教団 (タリーカ) であるアフマディ教団が結成され、15世紀の中頃に降盛んに活動したとあるが、これはインドで生まれたものとは全く関係がないらしい。

インドにおけるイスラム改革運動の初まりは、サイイド・アフマド・カーン^⑦ (1817-1898) であった。彼はイスラム近代主義を標榜し、ムスリム社会の近代化のため、「モハメダン・アングロ・オリエンタル・カレッジ」を創立した。カーンは教育の重要性を悟り、イスラム教育とともに近代的な西欧科学教育をも施すことにより、近代世界に適応できるムスリムの育成を考えた^⑧。この考え方はムハマディヤの精神と一脈相通じる。そして、彼の近代主義は、アフマディヤの運動に強い影響を与えたのである。

所で、アフマディヤ運動に関する概説書としては、ペトルス・ブリュムベルヘルの研究が参考となる^⑨。ただ彼の研究対象は近代インドネシアにおける民族主義運動全体であり、自身がオランダ植民地政府の役人でもあったので、その叙述にはある程度限界があったことを考慮せねばならない。

さて、アフマディヤは1889年、西北インドの小村カーディアン (Qadiyan) において、ミルザ・グラム・アフマド (Mirza Ghulam Ahmad) (1835-1908) により、設立された。彼の父はイギリス植民地政府の下級役人をしており、ミルザは小さい頃よりイスラムの勉強を熱心にした。アラビア語を学び、コーランを初めとするイスラムに関するたくさんの本を読破するとともに、ペルシア語も勉強した。29歳になってから4年間

イギリスの裁判所で働いた。その後執筆活動に専念し、得意の語学力を生かし、アラビア語・英語・ペルシア語・ウルドゥ語による90以上のイスラムに関する啓蒙書を出版した^⑩。ミルザがアフマド・カーンの改革運動に大きな影響を受けたであろうことは、両者の足跡を見る時、十分に想像がつく。

アフマディヤという名の由来は、ミルザが生まれる600年も以前にさかのぼる。当時高名なイスラムの闘士サイイド・アフマド・アル・ブダウィが1つのタリカト (Tariqat 教団) を設立した。それが、アフマディヤあるいは、ブダウィヤと呼ばれた。ミルザが改革団体を設立するにあたり、団体名として“ミルザイヤ”あるいは設立地により“カーディアニヤ”という名も上ったけれども、イスラムの高名な先人の名にあやかり、アフマディヤと命名した^⑪。

ミルザの改革運動は、端的に言えば、近代社会に適応するため、イスラムの再解釈を行おうとするものであった。即ち“イジュティハード (ijtihad 個人的解釈) の扉は開かれている”という改革運動に共通のスローガンを掲げたわけである。しかし、アフマディヤの運動は正統派であるスンナ派の教義からしだいに逸脱してゆく。即ち、アフマディヤの支持者たちが、ミルザをイマーム及びマフディーとみなすようになるからである。マフディーはシーア派による隠れメシアの思想で、スンナ派からすれば異端の考えであるからである。例えばアフマディヤの教説の1つに「コーランの中には、ムハンマドの後、預言者がいることを説明している節が多くある。」とか、「ムハンマドは預言者の長である。そして、イスラム法は最後の法である。それ故、ムハンマドはイスラム法を続けるための責務を実行する追隨者の預言者を必要とする^⑫。」という部分は、ムハンマド以後の預言者を

想定しており、正統派からすれば、当然認めることの出来ない考え方で、スンナ派のウラマたちを怒らせた。

ミルザの死後、アフマディヤはカーディアン派とラホール (現パキスタン) 派に分裂する。前者は、ミルザの息子ミルザ・バシルッディン・マフムード・マフマドを長とし、後者はミルザの高弟マウルヴィ・ムハンマド・アリをリーダーとした。両者の教義上の対立は、ミルザを預言者と認めるか否かで争われ、前者はそれを認めた^⑬。この後、カーディアン派はインドネシアのスマトラに、ラホール派はジャワに伝道師を送り、それぞれの支部を設立して勢力を競った。

3 『ブカ・マタ』

ミナンカバウにカーディアン派の伝道師マウルヴィ・ラフマト・アリがやって来たのは1925年のことで、ブカ・マタも同時に創刊されている。手際の良さに驚く。25年という、ムハマディヤがミナンカバウのマニンジャウに活動拠点を見出した時で、ジャワで勢力を拡大したこの団体が、外領へ向けてそのエネルギーを噴出させる時期と重なっている。

『ブカ・マタ』はアフマディヤ・カーディアン派の宣伝雑誌で、メナンカバウの中心都市パダンで出版された。月2回の発行で、勿論、インドネシア語で書かれている。表紙の字ブカとマタの間には、そのものズバリ開いた人間の目が描かれている。さらに表紙中段にはトルコ帽をかぶった男性が望遠鏡を覗いている絵もある。目をよく見開いて遠くを見よということらしい。加えて、表紙には次の様な文章が書かれている。“目ざす方向は、多くのうそつきとうそによってばらまかれた様々な混迷と暗黒を白日のもとにさらすこと。”表紙からして、非常に刺激

的であり、挑戦的でもある。編集長はシェク・モハマド・サハク。この人物の出自は分らない。

ブカ・マタの内容はアフマディヤの宣伝と、正しいイスラムの知識の普及、いわゆる啓蒙の書である。中ではたくさんのコーランの章句がアラビア語で紹介されており、それには必ずマレー語（インドネシア語）の訳がつけられている。

ここで、もう少し書かれている内容にたち入ってみよう。1926年の10月14日号には「カーディアンへの旅行」という記事がある。編集長のサハクがアフマディヤの本部を訪れた旅行記で、カーディアンの様子が詳しく書かれている。記事によると、カーディアンはイギリス人によるインド人虐殺事件で有名な町アムリツァルの北東の町バタラの近くの小さな村で、人口3000人くらい。住民の中にはヒンドゥー教徒やシーク教徒もおり、マスジド（モスク）は1つでアフマディヤ学校があると言う。イクバルハク（Iqbalhaq 真実の伝達）という新聞が発行されており、イクバルハク委員会があるとも書かれている。創立者ミルザの墓があり、その周りにも多くの墓があるとのこと。恐らくアフマディヤ会員のものであろう。

もう一つ興味深い内容、それはムハマディヤに関する記述。1926年11月26日号には、ムハマディヤのパダン・パンジャン支部のことが短かく報じられている。この支部の設立にあたっては、ジョクジャの中央本部から第1副委員長のハジ・ファハロディンがやって来ており、彼の名前も見える。さらに、アブドゥラー・アフマドも紹介している。アブドゥラーはパダンの著名な改革派ウラマーでアダビヤ（Adabiyah 礼儀）学校の創立者であるとともに、アル・ムニール（Al-Munir 光明）という雑誌の発行者でもあった。

ともあれ、『ブカ・マタ』が改革運動の雑誌の

1つとしてミナンカバウ社会の人々を開眼させたかどうかは定かでないけれども、インドネシアのイスラム改革運動史を解明する上では、貴重な史料であることに間違いはないといえよう。ただ、残念なことに、どれくらいの発行部数で、どのくらいの期間出されていたのかは明確でない。この点の解明はこれからの課題としたい。

おわりに

アフマディヤが西スマトラにおいて、ムハマディヤと同じスタートラインに立ちながら、後者が著しく支部を拡大したのに対し、前者への支持が微々たるものにとどまったのは何故であろうか。アフマディヤの教義が正統派のそれからはずれているという理由が第1に考えられるけれども、コーランをオランダ語訳したり、ミルザの著作をオランダ語訳で出版する^⑩という行為がインドネシア人の意識を逆なでしたのではないかと思える。アフマディヤは現在もインドネシアで存続している。その勢力が微々たるものであるとはいえ、その息の長さには驚かされる。

それはともかくとして、インドネシアのイスラム改革運動は、まだ解明されない点が多々残っている。『ブカ・マタ』はその一例であるが、改革運動に関する史料を発掘し、ひとつひとつ明らかにしてゆくことが大切であろう。

最後に、ジャワに伝わったラホール派のアフマディヤ運動については、いずれ稿を改めて発表するつもりである。

註

- ① Deliar Noer, *The Modernist Muslim Movement in Indonesia 1900- 1942*, Oxford Univ. Press, 1973.
- ② Alfian, *Muhammadiyah: The Political Behavior of a Muslim Modernist Organization under the Dutch Colonialism*, Gadjah Mada Univ. Press, 1989.
- ③ *Riwayat Hidup Perjuangan 20 Ulama Besar Sumatera Barat*, Islamic Center Sumatera Barat, 1981.
- ④ Deliar Noer, *op. cit.*, pp. 43- 56.
- ⑤ HAMKA, *Muhammadiyah di Minangkabau*, Yayasan Nurul Islam, Jakarta, 1974.
HAMKA, *Ayahku: Riwayat Hidup Dr. H. Abdul Karim Amrullah dan Perjuangan Kaum Agama di Sumatera*, Unminda, Jakarta, 1982.
- ⑥ Taufik Abdullah, *Schools and Politics: The Kaum Muda Movement in West Sumatra (1927- 1933)*, Cornell University, 1971.
- ⑦ Hafeez Malik, *Sir Sayyid Ahmad Khan and Muslim Modernization in India and Pakistan*, Columbia Univ. Press New York, 1980.
- ⑧ 板垣與一『アジアの民族主義と経済発展』東洋経済, 昭和48年, p.315.
- ⑨ J. Th. Petrus Blumberger, *De Nationalistische Beweging in Nederlandsch- Indië*, Foris Publications, Dordrecht Holland, 1987. 及び *Encyclopaedie van Nederlandsch Oost- Indië VI Supplement*, Martinus Nijhoff, 1932. の中の AH-MADYAH の項.
- ⑩ Drs. Hamka Haq Al- Badry, *Koreksi Tatar terhadap Ahmadiyah*, Yayasan Nurul Islam, Jakarta, 1980, pp. 24- 25.
- ⑪ Abdullah Hasan Alhadar, *Ahmadiyah: telanjang bulat di panggung sejarah*, PT ALMA' ARIF, Bandung, 1982, p. 36.
- ⑫ Drs. Hamka Haq Al- Badry, *op. cit.*, p. 44.
- ⑬ 間苧谷栄『現代インドネシア研究』勁草書房, 1983年, p.178.
- ⑭ Mirza Ghoelam Ahmad, *Leerstelling Van Den Islam*, Electrische Drukkerij Tan Sorij Bing, Soekaboemi, 1931.